

イタリア詩を読むために

鈴木 覺

はじめに

この小論のもとになつてゐるのは、筆者が個人用に纏めたイタリア語韻律法に関する覚書である。フランス留学時代にイタリア文化会館の先生からイタリア語を教へて戴いたときに使用した教科書 S. Camugli et al., *Précis de grammaire italienne*, (Hachette, 1967) の巻末にあつたイタリア詩の韻律に関する数頁の概説を下地にして、それに折に触れ加筆して作成したものである。

最近イタリア語を学ぶ人が多く見掛けられ、それに伴ひイタリア文学に対する関心も高まつて来てゐるやうである。NHKテレビ・イタリア語講座用のテキスト発行部数が或る時期には八万部を数へたさうで、ラジオ・テレビを併せたイタリア語講座の視聴率はかなり高いと聞いてゐる。

今年(二〇〇六年)のNHKのラジオ・イタリア語講座応用編では、三箇月に亘り Giosué Carducci と Giovanni Pascoli の作品を鑑賞する初めての試みがあつた。しかし、ラジオ・テキストや放送では、残念ながら、韻律の説明は極く簡単な注記と説明でお茶を濁してゐるだけである。どうしても意味の理解に力点が置かれてゐて、音読の仕方や韻律の説明がないがしろにされてゐる。詩は、ある程度意味が把握出来たら是非とも声を出して読んで欲しいと思ふこと切である。詩は黙読だけでは絶対に味はへない。なぜなら、詩は音声による一種の音楽だからである。しかし、ただ闇雲に読ん

でも、正しい音読は不可能である。特に詩句の音綴の数へ方を知らずして、いきなり読んでも余り意味がない。日本語は子音と母音とが同時存在的で両者が離れ難く結びついて一音を形成してゐる。ところが、イタリア語では子音と母音はそれぞれ一音で独立しつつ、それが互ひに結びつく。更に、韻文の中では二つの母音が一音節だったり、二音節だったりする。イタリア語の母音には長短の区別はない。その他いろいろ日本語とは音韻論的に違ふ点が多々ある。要するに、日本人として身に付いた等拍的なリズム感をイタリア語に持ち込んで、いきなり音読してもイタリア語のリズムにはならないのである。ラヂオ放送でも韻や音綴数に触れることはあつても、音綴の数へ方は教へてゐない。孤立した単語と韻文の中での単語とでは音綴の数へ方が微妙に違ふので、単に各行の音綴数を言つただけで果して聴取者が正しく数へられるか、これまでの私の経験からして甚だ疑問である。

ところが、イタリア詩を正しく読むにはどうすればいいのか自分で調べようと思つても、初心者向けにイタリア詩を日本語で解説した手頃な本がない。比較的詳しい文法書、例へば坂本鉄男氏の『現代イタリア語文法』（白水社、一九七九年刊）は四百頁を超える参考書であるが、詩法の説明は全くない。かうした間隙を埋める意味で、私的に書き留めてゐたものを公にすることにしたのである。覚書程度のもので公表すれば、幾ばくかイタリア語学習者に裨益するところがあるのではないかと思つたのである。ラヂオ講座で読まれてゐた Carducci と Pascoli の詩については、説明が不充分と思はれたところは、この二人の作品からは多く引用して、説明しておいた。Petrarca に興味のある人達は canzone や sonetto の箇所をもの足りないと思はれるかも知れない。これらの詳述は他日を期したい。浅学の故に筆者が知らず識らずに犯してゐる間違いがあるかも知れない。大方の御批判を戴ければ幸甚である。

最後に、この小論の表記に関して一言述べておきたい。詩法特有の術語が登場するが、アツチエントがどこにあるか分りにくい語については、初

出の際にのみアッチェントの落ちる母音をイタリック体で表してある。名詞の性は、分りにくい場合だけ括弧内に m.(=maschile) とか f.(=femminile) で示した。

次に、日本語の表記についても一言書き添へておきたい。ダンテの『神曲』を読む或る小さなサークルで本稿より簡略なイタリア詩法のメモのやうなものを配布したことがあるが、それは、「契沖」といふワープロを使用して正統字体（いはゆる舊漢字）・正統仮名遣ひ（いはゆる歴史的仮名遣ひ）で表記してあつたのだが、今回稿を改めて公表するにあたり、漢字は一般のワープロでは総ての漢字を正統字体で完全に表記するのは不可能なことや、更にワープロ原稿を印刷に付する際の事情等を考慮して、文字学的観点から問題点の甚だ多い新字体をやむを得ず用ゐた。仮名遣ひは正統仮名遣ひを用ゐた。

それでは本論に入らう。

本論

§ 1. 音綴 *sillaba* と韻律音綴 *sillaba metrica*

(a) 語としての音綴と韻律としての音綴、音読の仕方

イタリア詩を読む場合には、まづ各行（各詩句）が何音綴からなつてゐるかを知ることが大切である。我々外国人がそれを知らないで読んだのでは詩のリズムを把握することは不可能である。そこでダンテの『神曲』地獄篇冒頭の詩句 *verso* を例に音綴数を調べることから始めよう。

Nel mezzo del cammin di nostra vita,

この詩句は次のやうに十一音綴から出来てゐる。

Nel mez - zo del cam - min di no - stra vi - ta,

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

しかし、同じ語でも、孤立してゐる場合の音綴数と詩句の中での音綴数は必ずしも一致しない。第二行目を調べてみよう。

mi ri - tro - vai per u - na sel - va o - scu - ra

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

ritrovai の語末 ai は一音綴と見做される。

selva は二音綴の語、それに続く oscura は三音綴の語であるが、詩句の中では selva の語末音 a と後続の o とが一音綴として数へられる。続く三行目

che la di - rit - ta vi - a e - ra smar - ri - ta.

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

においても、via の a と era の e とが一韻律音綴として数へられる。音読する際にはこれらの融合した母音間では声が途切れることなく滑かに読まなければならない。

このやうに、詩句においては語と語の間、同一語内で母音が融合することがある。この点をもう少し詳しく調べてみよう。

(b) 同一語内母音融合 *sineresi* (f.)、同一語内母音分割 *dieresi* (f.)、語間母音融合 *sinalefe* (f.)、語間母音分割 *dialefe* (f.)、母音連続 *iato*

Cuneo possente e paziente e al vago

declivio il dolce Mondovì ridente.

Carducci, *Piemonte, Poesie*.

この二つの詩句も十一韻律音綴から成つてゐる。すなはち、

Cu - neo pos - sen - te e pa - zī - ente e al va - go

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

de - cli - vio il dol - ce Mon - do - vī ri - den - te,

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

(1) 上の引用で第一行における、-neo (Cuneo) の部分が、一音綴と見做される。これを同一語内母音融合 *sineresi* と言ふ。

(2) それとは逆に、iēn (paziente) は二音綴と見做される。これを同一語内母音分切 *dieresi* と言ふ。

- (3) declivio の語尾 *vio* と次の *il* が一音綴と見做される。これを語間母音融合 *sinalefe* と言ふ。*-ente e al* の部分も同様である。
- (4) 次の詩句の *-t'è amara* の部分では、*t'è* と *a* とが二音綴として数へられ、これを語間母音分切 *diafe* と言ふ。

Tan - t'è am - a - ra che po - co è più mor - te
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

Dante, *Inf.*, I, 6.

(c) 母音連続

最後に次の詩句を調べてみよう。

Più è ta - cer che ra - gio - nar o - ne - sto
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

Dante, *Par.*, XVI, 45.

この詩句も十一韻律音綴から成り、*ù* (*più*) も *è* も強勢が置かれる語であるので、それぞれが一韻律音綴と数へられる。この場合には *sineresi* は起きない。これを母音連続 *iato* と言ふ。

§ 2. 詩句 *verso*

(a) 詩句と音綴数

詩句は一定の数の音綴から成り、これによつて詩句の性格が決る。

各詩句の強勢を有する最後の音綴まで数へて、それに一音綴を加へる。すなはち、例へば、十一音綴詩句 *endecasillabo* では、その第十音綴目に強勢があり、十音綴詩句 *decasillabo* では、その第九音綴目に強勢がある。

(b) 完全詩句 *versi piani*、冗長詩句 *versi sdrucchioli*、不完全詩句 *versi tronchi* 詩句には三つの場合がある。

E il naufragar m'è dolce in questo mare

Leopardi, *L'Infinito*.

この詩句では十音綴目に強勢があり、それに無強勢の一音綴が添へられてゐる。詩句最後の語が *parola piana* なので、この詩句は *endecasillabo piano* と呼ばれる。

E sulle eterne pagine
cadde la stanca man,

Manzoni, *Il cinque maggio*.

第一行では最終強勢音節 (pa-) の後に二音綴 (-gine) あるが、これが一音綴と見做される。これを冗長詩句 *verso sdrucchiolo* と言ふ。第二行は最終強勢音節 (man) の後に一音綴が欠けてゐる。これを不完全詩句 *verso tronco* と言ふ。しかし二行とも七音綴の詩句 *settenario* とされる。

N.B. (i) *verso sdrucchiolo* (*sdrucchiolo* の原義は「滑つて転ぶ」) では強勢を帯びた後に無強勢の音綴が二つもあるので、声が「ずつこけ」て弱まり無強勢の二音綴は一音綴にしか見做されない。これに反し、*verso tronco* (*tronco* の原義は「端を切取られた」) では通常強勢音綴の後にあるべき無強勢一音綴が欠けてゐるので、これに「すつぽかし」を喰らひ、声が強勢を帯びたまま「尻切れ蜻蛉」(宙ぶらりん) の状態のまま留る。

(ii) *accento* の位置をずらして強制的に一音綴加へたり (*diastole*(f.)) 減らしたり (*sistole*(f.)) して詩句を整へることがある。

Esso atterrò l'orgoglio delli Aràbi

Dante, *Par.*, VI, 40.

本来の発音は *Àrabi* で *decasillabo sdrucchiolo* となるところを、*Aràbi* と発音して *endecasillabo piano* にしてゐる。

Alla man destra vidi nuova pietà

Dante, *Inf.*, XVIII, 22.

本来の発音は *pietà* で、*dodecasillabo tronco* となるところを、*pietà* と発音して *endecasillabo piano* にしてゐる。なほ、ダンテは *pieta* と *pietà* とで意味の使ひ分けをしてゐる。

(iii) 次の例において、第三行目の詩句は一見 *verso sdrucchiolo* のやうだ

が、resta-までは第一行目の詩句の tempesta と韻を踏んでをり、語末の -no は次の詩句と novenario（後述）を形成してゐる。これを語切断 tmesi (f.) といふ。

È quella infinita tempesta,
finita in un rivo canoro.
Del fulmini fragili restano
cirri di porpora e d'oro.

Pascoli, *La mia sera*.

次も tmesi の例である。

così quelle carole differente-
mente danzando, della sua ricchezza

Dante, *Par.* XXIV, 16-17.

(c) 詩句の主要型

詩句には偶数音綴詩句 verso parisillabo と奇数音綴詩句 verso imparisillabo がある。

(1) endecasillabo は十音綴目に強勢のある十一音綴詩句である。

Sotto due negri e sottilissimi archi
son due negri occhi, anzi due chiari soli

Ariosto, *Orlando Furioso*, VII, 12.

Sot - to due ne - gri e sot - ti - lis - si - mi ar - chi
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11
son due ne - gri oc - chi, an - zi due chia - ri so - li
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

(2) decasillabo は九音綴目に強勢のある十音綴詩句である。

S'ode a destra uno squillo di tromba
a sinistra risponde uno squillo

Manzoni, *Il Conte di Carmagnola*.

S'ò-de a de stra u - no squil - lo di trom - ba

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

a si - ni - stra ri - spon - de u - no squil - lo

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

- (3) novenario は八音綴目に強勢のある九音綴詩句である。

Io vengo messaggio d'amore

Io vengo messaggio di morte

Carducci, *Jaufré Rudel*, *Poesie*.

- (4) ottonario は七音綴目に強勢のある八音綴詩句である。

Quant'è bella giovinezza

che si fugge tuttavia

Lorenzo de' Medici, *Trionfo di Bacco ed Arianna*.

- (5) settenario は六音綴目に強勢のある七音綴詩句である。

Or la squilla dà segno

della feste che viene;

ed a quel suon diresti

che il cor si rinconforta.

Leopardi, *Il sabato del villaggio*.

- (6) senario は五音綴目に強勢のある六音綴詩句である。

la pendola batte

nel cuor della casa

Pascoli, *Mai più*.

- (7) quinario, quaternario, ternario はそれぞれ四音綴目、三音綴目、二音綴目に強勢がある。

- (8) 短い詩句は互ひに結合し合つて、decasillabi (due quinari), dodecasillabi (due senari), martelliani (due settenari)を形成することがある。

Donde venisti || quali a noi secoli

(decasillabo sdrucchiolo)

sì mite e bella || ti tramandarono ?

Carducci, *Alla regina d'Italia, Poesie.*

Dagli antri muscosi || dai fori cadenti (dodecasillabo)

Manzoni, *Il Conte di Carmagnola.*

Principe, tu non godi? || Tu sposo, e con cotesta (martelliano)

fronte per le congiunte || ciglia, perché sì mesta?

Se può guardo fraterno || giudicar di sorella,

fra le pigmee fanciulle || non forse è la men bella, ...

Pier Iacopo Martello, *Lo Starnuto di Ercole.*

N.B. (i) martelliano とはフランス詩の alexandrin に倣つて settenario を二つ連ねた詩句。この種の詩句は中世の古謡にも見られるが、フランス古典主義時代の P. Corneille や J. Racine の alexandrin を模倣して悲劇を作つた Pier Iacopo Martelli (1665-1727) に因んで martelliano と名付けられてゐる。Goldoni などこの詩句を使用してゐる。抒情詩では Carducci の作品がある。

Su i campi di Marengo || batte la luna ; fòsco

Tra la Bormida e il Tanaro || s'agita e mugge un bosco ;

un bosco d'alabarde, || d'uomini e di cavalli,

che fuggon d'Alessandria || da i mal tentati valli.

Carducci, *Su i campi di Marengo, Poesie.*

(二行目の初めの半句 (emistichio) は、Tanaro の Ta-に accento があり、settenario sdrucchiolo である。なほ、Bormida も parola sdrucchiola である。)

(ii) 初めの emistichio の後には息継ぎが置かれる。これを cesura といふ。

(d) 韻律強勢 accenti ritmici o ictus (m. invariabile)

(1) endecasillabo の場合には三つ型の韻律強勢がある。すなはち 1° 六音綴目と十音綴目に韻律強勢を置く型 (6-10)、2° 四音綴目と七音綴目と十音綴目に韻律強勢を置く型 (4-7-10)、3° 四音綴目と八音綴

目と十音綴目（4-8-10）に韻律強勢を置く型がある。

Con l'altro se ne va tutta la gente (6-10)

Dante, *Pur.* VI, 4.

Di tutto ferro per te ritrovare (4-7-10)

Carducci, *Davanti San Guido, Poesie.*

Siede la terra dove nata fui (4-8-10)

Dante, *Inf.* V, 97.

N.B. (i) 六音綴目に韻律強勢のあるのを endecasillabo a maggiore、四音綴目に韻律強勢のあるのを endecasillabo a minore と言ふ。

(ii) まれではあるが、Dante などにも例外的な韻律強勢を持つ詩句が見出される。

vestito di novo d'un drappo nero

Dante, *Rime*, XXV (*Un dì si venne*), 9.

上の詩句では五音綴目に韻律強勢が置かれる。(5-8-10)

come fa donna che in parturir sia.

Dante, *Pur.* XX, 21.

上の詩句では九音綴目に韻律強勢が置かれる。(4-9-10)

(2) decasillabo の場合には三音綴目と六音綴目と九音綴目に韻律強勢を置く。

Già le spade rispington le spade

Manzoni, *Il Conte de Carmagnola.*

(3) ottonario の場合には三音綴目と七音綴目に韻律強勢が置かれる。

Chi vuol esser lieto, sia

Di doman non c'è certezza

Lorenzo de' Medici, *Trionfo di Bacco ed Arianna.*

(4) settenario の場合には詩句冒頭から四音綴のうちのいずれかと六音綴目に韻律強勢が置かれる。

Non sai che santuario (2-6)

al ver nell'alma alzai (2-6)
e che io del vero antistite (4-6)
sempre d'esser giurai. (3-6)

Foscolo, *La Verità*.

(5) *senario* の場合は二音綴目と五音綴目に韻律強勢が置かれる。

Ho l'anima invasa
dal tempo che fu.

Pascoli, *Mai più*.

まれに一音綴目、三音綴目、五音綴目に置かれることもある。

Dolci miei sospiri,
dolci miei martiri ...

Chiabrera, *Rime*.

N.B.勿論のこと、長さの不揃ひな自由詩句 *verso libero* も数多く見られる。

Nel paese di mia madre v'è un campo quadrato, cinto di gelsi.
Di là da quel campo altri campi quadrati, cinti di gelsi.
Rogge scorrenti vi sono, fra alti argini, dritte, e non si sa dove vanno a finire.
La terra s'allarga a misura del cielo, e non si sa dove vada a finire.

Ada Negri, *Nel paese di mia madre*.

Libro, tu Roma nostra vedrai. Ti manda alla grande
Madre colui che molto l'ama, che sempre l'ama.
Recale tu il dolente amore e il disìo che distrugge
l'esule, e il van rimpianto, ahi, del perduto bene.

D'Annunzio, *Saluto a Roma*.

§ 3. 脚韻 *rime*

二つの詩句の最終強勢音綴の母音以降が同じ音であるとき、二詩句は押韻してゐると言ふ。*gracile* と *facile*、*caffè* と *tè* がそれぞれ二詩句の最後にあるときは、これらは押韻してゐる。押韻にはその組合せによつて、

並行韻 *baciate* (o *accoppiate*), 交韻 *alternate*, 閉鎖韻 *chiuse*, 連鎖韻 *incatenate*, 三つ巴韻 *rinterzate ripetute* (反転三つ巴韻 *rinterzate invertite*) がある。

(a) rime baciate (o accoppiate)

O cavallina storna, cavallina <i>storna</i>	A
che portavi colui che non <i>ritorna</i>	A
tu capivi il suo cenno ed il suo <i>detto</i> !	B
Egli ha lasciato un figlio <i>giovinetto</i> ;	B
il primo d'otto tra miei figli e <i>figlie</i> ;	C
e la sua mano non toccò mai <i>briglie</i> .	C

Pascoli, *La cavalla storna*.

(b) rime alternate

Dirò d'Orlando in un medesmo <i>tratto</i>	A
cosa non detta in prosa mai, né in <i>rima</i> ;	B
che per amor venne in furore e <i>matto</i>	A
d'uom che sì saggio era stimato <i>prima</i> .	B

Ariosto, *Orlando Furioso*, I,1

(c) rime chiuse

Erano i capei d'oro a l'aura <i>sparsi</i>	A
che'n mille dolci nodi gli <i>avvolgea</i>	B
e 'l vago lume oltra misura <i>ardea</i>	B
di quei begli occhi ch'or ne son sì <i>scarsi</i> .	A

Petrarca, *Canzoniere*, XC.

(d) rime incatenate

Di quella costa, là dov'ella <i>frange</i>	A
più sua rattezza, nacque al mondo un <i>sole</i>	B

come fa questo talvolta di *Gange*. A

Però chi d'esso loco fa *parole* B

non dica Ascesi che direbbe *corto* C

ma Oriente, se proprio dir vuole B

Dante, *Par.*, XI, 49-54.

(e) rinterzate ripetute (ABC ABC) o invertite (ABC CBA)

Or volge, Signor mio, l'undicim' *anno* A

ch'io fui sommessò al dispietato *giogo* B

che sopra a' più soggetti è più *feroce* C

Miserere del mio non degno *affanno* A

riduci i pensier vaghi a miglior *luogo* B

rammenta lor com'oggi fosti in *croce*. C

Petrarca, *Canzoniere*, *Padre ciel...*

N.B. 韻律強勢のある母音だけで後続の子音の一致しない事例がときどき見られる。これを半諧音 *assonanza* と呼んでゐる。

e per tal verrò morto,

e 'l dolor sarà scorto

...

e sempre mai con lei starà ricolto, ...

Dante, *Rime*, XXI (*Lo doloroso amor...*), 23-26

上の例では *ricolto* が *morto* や *scorto* と強勢のある母音と末尾の無強勢の母音のみが合つてゐる。

§ 4. 詩節 *strofe* (f.) (または *strofa*) と様々な詩形

(a) 主な詩節には、二行詩節 *distico*、三行詩節 *terzina*、四行詩節 *quartina*、

六行詩節 *sestina*、八行詩節 *ottava*、九行詩節 *nona rima* がある。

- (1) *distico* は二行の詩句から成る。(§ 4NB (ii) 参照)
- (2) *terzina*, *terza rima* は *rime incatenate* によつて繋がれる。なほ、*sonetto* における *terzine* は後述 (§ 4, (b) (3) 参照)。
- (3) *quartina* は *rime alternate* または *rime chiuse* による四詩句からなる。
- (4) *sestina* は *ottava* から末尾の二詩句を減じたもの。
- (5) *ottava* は八詩句から成り、はじめの六詩句は交韻を踏み、最後の二詩句は並行韻を踏む (ABABABCC)。

D'un bel pallore ha il bianco volto asperso,
come a' gigli sarian miste viole,
e gli occhi al cielo affisa, e in lei converso
sembra per la pietate il cielo e 'l sole;
e la man nuda e fredda alzando verso
il cavaliere in vece di parole
gli dà pegno di pace. In questa forma
passa la bella donna, e par che dorma.

Tasso, *Gerusalemme liberata*, Canto XII, 69.

N.B. v.5-v.6 の verso *il cavaliere* は詩句としては切り離されてゐるが、意味の上からは切り離せない。これを *inarcatura* 或いは *enjambement* (フランス語からの借用) と言ふ。

- (6) *nona rima* は *ottava* に第二詩句と同じ韻をもつ詩句を加へたもの (ABABABCCB)。十三世紀の作者不詳の教化詩 *Intelligenza* に用ゐられた。G. Giusti や G. Marradi や G. D'Annunzio が懷古趣味的にこれを用ゐたことがある。
- (7) *decima rima* は十詩句から成り、ABABABCCDD による韻を踏む。
N.B. (i) *terza rima* では、締めくくりとして孤立した一詩句が置かれる。といふことは、つまり *terza rima* では冒頭の詩句と末尾の詩句の韻は、二度しか踏まれない (ABA, BCB, CDC, ... XYX, YZY, Z) といふことである。

次に示すのは『神曲』地獄篇第一歌の冒頭と末尾である。

Nel mezzo del cammin di nostra vita
mi ritrovai per una selva oscura,
che la diritta via era smarrita. 3

Ahi quanto a dir qual era è cosa dura
questa selva selvaggia ed aspra e forte,
che nel pensier rinnova la paura ! 6

.....

.....

Ed io a lui : “Poeta, io ti richieggio
per quello Dio che tu non conoscesti,
acciocch’ io fugga questo male e peggio, 132
che tu mi meni là dov’ or dicesti,
sì ch’ io vegga la porta di San Pietro,
e color cui tu fai cotanto mesti.” 135

Allor si mosse, ed io li tenni *retro*.

(ii) Carducci の *Odi Barbare* における韻律

Carducci は *Odi Barbare* においてギリシア・ラテンの詩句の模倣を試みた。
distico はギリシア・ラテンの *esametro* と *pentametro* に対応する。第一詩句は五音綴＋十音綴または七音綴＋九音綴の詩句から成る。第二詩句は五音綴＋七音綴または七音綴＋七音綴の詩句から成る。

Non sotto ferrea punta / che strida solcando maligna (7 + 9)
dietro un pensier di noia / l’aride carte bianche; (7 + 7)

Carducci, *Cèrilo*.

Passa crollando i lauri / l’immensa sonante epopea (7 + 9)
come turbin di maggio / sopra ondegianti piani (7 + 7)

Carducci, *Presso l’urna di Shelly*.

但し、同じ *Odi Barbare* の中には *Nevicata* といふ作品のやうに詩句の構成

が上に例示したものとは少々異なるものもある。もともと母音の強弱を基盤に作られるイタリア詩句を母音の長短を基盤とするギリシア・ラテンの詩句に合はせようとするところに無理があるので、どのやうに分析すべきが戸惑ふ場合も少なくない。少し詳しく調べてみよう。

Lenta fiocca la neve / pe 'l cielo cinerëa: gridi, (7+9)
suoni di vita più / non salgon da la città. (7tronco (= tr.) + 8tr.)
non d'erbaio la il grido o / corrente rumore di carro, (7+9)
non d'amor la canzon / ilare e di gioventù. (7tr. + 8tr.)
Da la torre di piazza / roche per l'aëre le ore (7+9) *
gemon, come sospir / d'un mondo lungi dal di. (7tr. + 8tr.)
Picchiano uccelli raminghi / a' vetri appannati: gli amici (8+9)
spiriti reduci son, / guardano e chiamano a me. (8tr. + 8tr.)
In breve, o cari, in breve / — tu calmati, indomito cuore — (7+9)
giù al silenzio verrò, / nel'ombra riposerò. (7tr. + 8tr.)

* 五行目は、もし aëre において dieresi が行はれ、更に le ore において dialefe が行はれてゐると考へれば novenario であるが、後者の dialefe をないものと考へれば ottonario となる。

(iii) strofe saffica (ギリシアの女流詩人 Saffo から) は三行の十一音綴詩句と一行の五音綴詩句 (adonio) とからなる四行詩節である。

Premio del verso che animoso vola (11)
da le memorie a l'avvenire, io chiedo (11)
colma una coppa a l'amicizia e il riso (11)
de la bellezza. (5)

Carducci, *Congedo, Odi Barbare*.

(iv) strofe alcaica (ギリシアの詩人 Alceo から) は二行の冗長十音綴詩句 decasillabi sdrucchioli (二つの五音綴詩句の並置) とそれに続く九音綴詩句と十音綴詩句から成る。

Davanti larga, / nitida, candida (5+5sdr)

splende la luna :/ l'astro di Venere (5+5sdr)

sorridele presso e del suo (9)

palpito lucido tinge il cielo. (10)

Carducci, *Scoglio di Quarto, Odi Barbare*.

(b) Ballata (o canzone a ballo), canzone, sonetto.

(1) ballata (o canzone a ballo) は一つの繰返し部分 ripresa と或る数の stanza * から成る。ripresa は四詩句、三詩句、二詩句ないし一詩句から成る。四詩句の場合は ballata grande、三詩句の場合は ballata mezzana、二詩句の場合は ballata minore、一詩句の場合は ballata piccola である。ripresa が七音綴詩句のときは minima と呼ばれ、ripresa が五詩句あるときは stravagante と呼ばれる。(* stanza = strofa della canzone, della ballata)

stanza は二部から成る。第一部は同数の詩句による二つの piedi から成り、第二部は ripresa と同じ韻律構造を持ち volta と呼ばれる。

(i) ballata mezzana の例 (con la ripresa minima)

Per una ghirlandetta	A
ch'io vidi, mi farà	B
<u>sospirare ogni fiore.</u>	C ripresa
I' vidi a voi, donna, portare	D
<u>ghirlandetta di fior gentile</u>	E primo piede
e sovr'a lei vidi volare	D
<u>un angiolel d'amore umile;</u>	E secondo piede
e 'n suo cantar sottile	E
dicea : « Chi mi vedrà	B
<u>lauderà 'l mio signore. »</u>	C volta

Dante, *Rime, Per una ghirlandetta*.

そして、詩全体の韻構成は ABC-DEDEEBC, FGFGGBC, HIHIIBC となつてゐる。

(ii) ballata grande の例

Volgendo gli occhi al mio novo colore,	A	
che fa di morte rimembrar la gente,	B	
pietà vi mosse; onde, benignamente	B	
<u>salutando, teneste in vita il core.</u>	A	<u>ripresa</u>
La fraile vita ch'ancor meco alberga,	C	
fu de' begli occhi vostri aperto dono,	D	
<u>e de la voce angelica soave.</u>	E	<u>primo piede</u>
Da lor conosco l'esser ov'io sono;	D	
ché, come suol pigro animal per verga,	C	
<u>così destaro in me l'anima grave.</u>	E	<u>secondo piede</u>
Del mio cor, donna, l'una e l'altra chiave	E	
avete in mano; e di ciò son contento	F	
presto di navigare a ciascun vento;	F	
<u>ch'ogni cosa da voi m'è dolce onore.</u>	A	<u>volta</u>

Petrarca, *Canzoniere*, LXIII.

(2) canzone は ripresa のない、同じ韻律構造で長さの等しい或る数の stanze からなり、commiato (または congedo) を最後に置く。これが古典的な canzone である。各 strofe は三部から成る (二つの piedi に分割出来る fronte、一詩句だけの chiave、二つの volte に分割出来る sirma (または sirima))。congedo は sirma (+ chiave) と同じ韻律構造を繰返すか、或いは単に最後の三詩句を繰返す。

Di pensier in pensier, di monte in monte	A	
mi guida Amor; ch'ogni segnato calle	B	
<u>provo contrario a la tranquilla vita.</u>	C	<u>primo piede</u>
S 'en solitaria piaggia, rivo o fonte,	A	
s 'enfra duo poggi siede ombrosa valle,	B	
<u>ivi s'acqueta l'alma sbigottita;</u>	C	<u>secondo piede</u>

-----ここまでが fronte

e come Amor l'envita	C	chiave
or ride, or piange, or teme, or s'assecura:	D	
e 'l volto che lei segue ov' ella il mena	E	
<u>si turba e rasserena,</u>	E	<u>prima volta</u>
e in un esser picciol tempo dura;	D	
onde a la vista uomo di tal vita esperto	F	
<u>diria : questo arde, e di suo stato è incerto.</u>	F	<u>seconda volta</u>

-----ここまでが sir(i) ma

[...]

最後に congedo で終る

Canzone, oltra quell'alpe,	G	
là dove il ciel è più sereno e lieto,	H	
mi rivedrai sovr'un ruscel corrente	I	
ove l'aura si sente	I	
d'un fresco et odorifero laureto.	H	
ivi è 'l mio cor, e quella che'l m'invola;	J	
<u>qui veder pôi l'immagine mia sola.</u>	J	<u>congedo</u>

Petrarca, *Di pensier in pensier*.

(3) sonetto は二つの quartine と二つの terzine から成り、それぞれが第一部第二部となり、各部内で押韻する。quartine における押韻は alternate または chiuse である。terzine における押韻は韻が二つの時は alternate であり (CDC-DCD)、三つの時は ripetute (CDE-CDE) または invertite (CDE-EDC) である。

ABAB-ABAB-CDE-CDE の例

Pace non trovo, e non ho da far guerra;
e temo, e spero; et ardo, e son un ghiaccio;
e volo sopra 'l cielo, e ghiaccio in terra;

e nulla stringo, e tutto 'l mondo abbraccio.

Tal m'ha in pregon, che non m'apre né serra;
né per suo mi riten né scioglie il laccio;
e non m'ancide Amore, e non me sferra,
né mi vuol vivo né mi trae d'impaccio.

Veggio senza occhi, e non ho lingua, e grido;
e bramo di perir, e cheggio aita;
et ho in odio me stesso, et amo altrui.

Pascomi di dolor, piangendo rido;
egualmente mi spiace morte e vita:
in questo stato son, donna, per vui.

Petrarca, *Il Canzoniere*, CXXXIV.

ABAB-ABAB-CDC-EDE の例

Amo te, nata in grembo della notte
o in alpestri caverne aspre di geli,
che per le solitudini incorrotte
alla bontà del sole avida aneli.

Or ti si oppone un masso, ora t'inghiotte
un baratro : tu scivoli, ti veli
d'ombra, ripiombi fragorosa in grotte
e n'esci calma a rispecchiare i cieli.

Sempre indocile, trepida, infantile,
con che dolcezza timida ti lagni
nella deserta pace d'un cortile!

Ma lietamente garrula, tra spini
d'agreste fosso, il misero accompagni
per ombre solitarie di cammini.

Francesco Pastonchi, *Acqua*.

ABBA-BAAB-CDE-CDE の例

O mia piccola dolce casa, vergine rossa
c'hai vergogna e ti celi in un manto di foglie
qua e là strappato, ancora nell'occhio si raccoglie
un pianto triste e il cuore prova una fredda scossa
s'avvenga che ripensi le tue deserte soglie,
il tuo muto giardino, la terra non rimossa
da tempo grande, come la terra d'una fossa,
la fossa ch'ogni mia dolce speranza accoglie.

Piccola casa rossa che il molle abbraccio tenta
del fiorito viale con mille incantamenti,
nell'ora triste in cui mi parve uscir di vita,
non io rossa ti vidi, ma come se una lenta
lagrima assai t'avesse corse le guancie ardenti,
mi sembrasti d'immenso dolore impallidita.

Sergio Corazzini, *Casa mia*.

ABBA-ABBA-CDE-CDE の例

So d'una villa chiusa e abbandonata
da tempo immemorabile, segreta
e chiusa come il cuore d'un poeta
che viva in solitudine forzata.

La circonda una siepe, e par murata,
di amaro bosso, e l'ombra alla pineta
da tanto più non rompe né più inquieta
la ciarlieria fontana disseccata.

Tanta è la pace in questa intisichita
villa, che pare quasi che ogni cosa
sia veduta a traverso d'una lente.

Solo una ventarola arrugginita,
in alto, su la torre silenziosa,
che gira, gira interminatamente.

Corrado Govoni, *Villa chiusa*.

N.B.その他の詩形としては、sestina, strambotto(o rispetto, in Toscana), stornello, madrigale(m.), epigramma(m.), ode(f.), inno, ditirambo, elegia, carme(m.), idillio, egloga, brindisi(m.)などがある。

sestina は十一音綴詩句六行から成る六詩節の詩形を採る。初めの六詩句の最後の語が各詩節に再び現れ、各詩節の最初の詩句は先行詩節の最後の詩句と同じ語で終る。sestina は、congedo を有し、その規模は stanza の半分つまり三行からなり、それまで韻を踏んできた語が、各詩句の中と末尾に置かれる。Petrarca の *L'aere gravato, et l'importuna nebbia* で始る作品 (LXVI) を見てみよう。

(Prima stanza)

L'aere gravato, et l'importuna nebbia
compressa intorno da rabbiosi vènti
tosto conven che si converta in pioggia;
et già son quasi di cristallo i fiumi,
e 'n vece de l'erbetta per le valli
non se ved'altro che pruine et ghiaccio.

...

(Sesta e ultima stanza)

Ben debbo io perdonare a tutti vènti,
per amor d'un che 'n mezzo di duo fiumi
mi chiuse tra 'l bel verde e 'l dolce ghiaccio,
tal ch'i' depinsi poi per mille valli
l'ombra ov'io fui, ché né calor né pioggia
né suon curava di spezzata nebbia.

(Congedo)

Ma non fuggió già mai *nebbia* per *vènti*,
come quel dí, né mai *fiumi* per *pioggia*,
né *ghiaccio* quando 'l sole apre le *valli*.

strambotto (o rispetto, in Toscana) は交韻を踏む一つの quartina と、quartina の内容を敷衍する二つの distici から構成される。(ABAB-CC-DD)

O bella che in Firenze siete nata,
in nella piazza di Santa Maria,
in San Giovanni foste battezzata,
vi tenne in grembo Santa Nastasia,
fareste innamorare persona bella
che con voi parla ragiona e favella,
fareste innamorare ogni persona,
che con voi parla, favella e ragiona.

Canto popolare toscano.

stornello は、花の名を挙げる quinario または settenario とそれに続く二行の十一音綴詩句によつて構成される。

Fior tricolore
tramontano le stelle in mezzo al mare
e spingono i canti entro il mio cuore.

Carducci, *Congedo, Rime e Ritmi*.

この小論を編むに当つて参考にした文献のあらまし

G. Bertone, *Breve dizionario di metrica italiana*, Einaudi, 1999. (書名にも拘らずギリシア・ラテンの詩法に関する説明もある事典形式の概説書)

- S. Camugli et al., *Précis de grammaire italienne*, Hachette, 1967. (冒頭で述べた通り、初級文法書で、詩法の専門書ではないが、巻末にあるイタリア詩の概説をこの小論の骨格に用ゐた)
- W. Th. Elwert, *Versificazione italiana dalle origini ai giorni nostri*, Le Monnier, 1983. (イタリア詩法のどの参考文献目録にも必ず挙げられる代表的な著書であるが、初心者には難解な本である。ある程度イタリア詩法を学んでから読むべき著作であらう)
- G. Sangirardi et al., *Breve guida alla metrica italiana*, Sansoni, 2002. (余り詳しくはないが、引用の内、中世やルネサンスの作品には現代イタリア語訳が付けてあり、説明も親切で分かりやすい。この小論を読んだ上で更に詳しく調べたいと思ふ人には先づこれを薦める)